

日水村は人口三百人程度の小さな集落だ。

翡翠色に澄んだ溪流を見下ろし、道祖神が見守る峠道を抜けると、周囲には案山子がたえずむ田畑が延々広がり、こぢんまりしたビニールハウスや鄙びた古民家が点在する。手ぬぐいで頬かむりをし畑を耕す農家の大半は七十代以上の高齢者で、若夫婦や子供は見かけない。

村の北側は標高600メートルの日水山に面しており、白塗りの土塀を巡らした立派な屋敷が麓に鎮座していた。

六月下旬某日、村を嵐が襲った。

雨合羽を着込んだ青年団が総出で避難誘導を行うなか、駐在の沖田も救援活動に駆り出されていた。

「須藤のじいさん、畑が心配だからビニールシート掛けて来るとさ」

「馬鹿言ってんじゃない、吹き飛ばされちまうぞ」

「ゴンはどこだ」

「ゴンって誰だ」

「桑原のじいさんが飼ってる雑種犬だよ、出る時おいてきちまっただと」

「しかたねえ迎えに行く」

「公会堂に入れていいのか？ ぶるぶるしねえか？」

「緊急事態だ大目に見ろ！」

普通の声は暴風雨にかき消されてしまったため、怒鳴らなけ

れば会話が成立しない。黒い光沢のゴム長が行ったり来たり、忙しく泥をはねとばす。

時刻は午後八時、昨夜未明にかけ降り始めた雨と風は強くなる一方。県内では実に八十年ぶりとなる、記録的な降水量だと報道されているらしい。近隣の市町村でも土砂崩れや河川の氾濫が起きている。

村の中心には学校の体育館によく似た、鉄筋コンクリート製の公会堂がある。

村人たちの多くは先祖から受け継いだ古民家に住んでいるが、築百年以上が経過した家は軒並み雨漏りや浸水、倒壊の脅威にさらされ、台風一過まで公会堂に寝泊まりを余儀なくされた。

「仏壇おいてきちまって良かったのかねえ」

「けどあんた、さすがにおぶって持ってこれないだろうよ。また腰やつちまうよ」

「せめて旦那の位牌だけでも」

「あつ、屋根が飛んだ！」

「うちが心配じゃ、様子を見てくる」

「待ちなさい！」

「ゴンが呼んでるんじや」

「青年団の人たちが連れて来てくれるのを大人しく待つてなさい、遭難したいの？」

老人たちは不安げな面持ちで毛布にくるまり、ポータブルテレビの台風情報に見入っている。四角い画面に映るニュースキャスターが滑舌よく原稿を読み上げていく。

『6月29日午後8時現在、台風17号は関東圏を通過中です。今回の台風は非常に勢力が強く、各地で土砂崩れや河川の氾濫、数百世帯におよぶ家屋の倒壊などの甚大な被害をもたらしています。該当地域にお住まいの方々は行政の勧告に従って戸締りを徹底し、外に出ないようにしてください。次のニュースです、長野県在住の小学生が下校中に誘拐されました。被害者が使っていた通学路では一週間ほど前から不審な中年男性が目撃されており、警察はこの人物の行方を追っています』

皺ばんだ手のひらに数珠を手繰った老婆が「なんまんだぶなんまんだぶ」と唱え始める。時折ノイズで乱れる年代物のポータブルテレビを車座で囲み、老人たちが神妙な顔を見合わせる。

「やはり祟りじゃ……」

「お山を切り崩した罰が当たったんじゃ」

日水村は長らく天災と縁のない土地柄であり、台風の迂回に慣れた村人たちが慢心していたのは否めない。

が、前例は覆された。

荒天に稲妻が瞬き、窓に叩き付ける雨の勢いが増してゆく。

滝の如く雫が伝い落ちるガラスに映りこむ避難者の顔は、亡霊のように生氣が希薄だ。

「病気の当主を蔑ろにしよって」

「全部佐沼の倅のせいじゃ、アイツが欲に目が眩んで土地の利権を売り渡したから神様がお怒りになったんじゃ」

老人たちの瞳は畏怖に陰り、時折闇に沈んだ窓の外を……否、その遥か向こうの山影を窺っている。

「ふ……」

沖田は庇から滴る雫を目で追い、日水山を仰ぐ。

日水村は辺鄙な所だ。

個人所有の車を除けば、一日二本運行しているバスだけが数少ない交通手段となる。故に災害が起きると孤立しやすい。村人たちは迷信深く、今もって呪いや祟りの存在を信じている。

沖田はいわゆるよそ者だった。

当時は空気のうまさと自然以外に取り柄がない田舎に飛ばされた我が身の不運を嘆いたものだが、三年経った現在はすっかり馴染んだ。自転車に跨り巡回していると誰彼となく群がり野菜をもたせてくれるし、交番にもちよくちよく差し入れに来る。

住民の殆どが七十超えの年寄りなせい、今年で三十五の自分が若造扱いされるのは釈然としないものの、おおらか

な気風を気に入って永住を検討し始めていた。

定住を決めた動機には下心……もとい、想い人の存在も関わっているのだが。

ふと心配になり、公会堂の窓に板を打ち付けている青年団に断る。

「佐沼さんのお宅を見えます」

案の定、一同は渋面を作った。内心ほっとけばいいと思っているにしろ、口に出さないだけの良識は持ち合わせている。

「気を付けて行けよ」

「しかし佐沼の倅は薄情もんだ、村の一大事だつてのにツラも見せねえで」

「よそからきた駐在さんが走り回ってくれてるつていうのに……少しは手伝えつてんだ、全く」

「村の恥め」

「倅が倅なら嫁も嫁だ、知らんぷり決め込みやがつて」

「御舅さんの世話で大変なんですよ、台風のせいで通いの家政婦さんも休んでますし」

咄嗟に庇った。

「人妻に惚れたつて報われねえぞ」

「あの嫁はしたたかだからな。佐沼の倅と結婚したのも玉の輿狙いつて話じゃねえか」

「じゃなきやあんな穀潰しのドラ息子が都会の美人と一緒になるかよ」

「水商売上がりだつて噂だぜ、前は高級クラブにいたと」

「六本木でホステスやつてたんだろ、尚人を接待したのが馴れ初めとか」

「保険金目当てじゃねえの」

「言えてる」

青年団の面々がお手上げといった感じで苦笑する。反論は無駄と悟り、佐沼家の悪口で盛り上がる青年団に背中を向ける。

村一番の旧家である佐沼家が敵視されているのには理由があった。

全ては三年前、東京で事業に失敗した長男の尚人が、若い嫁を連れ帰った事から始まる。

尚人は一度結婚に失敗している。清美は後妻にあたり、年は二十歳以上離れているそうだ。

故郷に帰った尚人は、先祖代々佐沼家が持っていた山の権利を黒い噂が絶えない土建業者に売り飛ばす。

後で事情を知った村人たちは激怒する。

何故なら日水山はただの山にあらず、日水村の人々にとって土地神の社がある神聖な場所だったのだ。

即ち、里の民の信仰対象として拜まれる山。

されど尚人は村人たちの意見を無視し、土建業者と組んで日水山の開発を断行する。ホテルを建てる計画だったのか道路を通そうとしたのか、本当の所はわからない。

結論から述べれば、日水山の開発工事は不可解な事故が相次いだせいで頓挫した。

現場に乗り入れた重機が故障するのは序の口。作業員が急死する、大怪我する、挙句工事を取り仕切る土建業者が倒産する等の不幸が続き、工事の継続が不可能になったのである。

さらには尚人の父である現当主・文彦の容態が悪化し、認知症を併発する。

「日水山の崇りじや」

「佐沼の倅は禁忌にふれた」

佐沼家を見舞った因果応報の災難に、村人たちは留飲をさげた。

とはいえ、尚人はまだ諦めてない。

現在も開発を仕切り直す機会を窺い、色々画策しているらしい。交渉だのなんだのと、父と嫁を残し家を空ける事も増えた。

恐れ多い。罰当たりな。保守的な村人は尚人の蛮行を恐れ疎んじ、佐沼家を避け始めた。

不幸中の幸いというべきか、佐沼家は県内指折りの資産家

なので村八分にされた所で痛くも痒くもない。

沖田は真面目で誠実な人間だった。警官を志す位だから人並み以上に正義感も強い。

もとより強欲で詐欺への関与も疑われる尚人は自業自得として、その嫁の清美まで冷遇されるのをほうっておけず、何かと相談にのってやっているうちに親しくなったというのが一連の経緯である。

よそ者同士、清美も沖田にだけは心を開いていた。不器用で実直な人柄に好感を持ったのかもしれない。

勢いよく吹き付ける暴風雨に抗い、交差させた腕で顔を庇い、なだらかな坂道をのぼっていく。

通り過ぎたそばからビニールハウスが豪快にはためき田んぼの案山子が顔れ、屋根瓦がなだれ落ちていく。

両岸に土嚢を積んだ水路には轟々と濁流が渦巻き、無人販売所の掘っ立て小屋は半壊していた。

心細い思いをしているに違いない清美の無事を祈り、顎に力を込め足を踏み出す。昭和から現役の赤い筒型ポストをこえると、篠突く雨に煙る屋敷が見えてきた。

「あ」

接近に伴い一声漏らす。重厚な数寄屋門の前に、白い傘を差した人影が立っていた。

「何やってるんですか、清美さん！」

水たまりをはねちらかし駆け寄る。沖田の顔を見るなり、女が安堵の息を吐く。

「尚人さんの帰りが遅いから心配で……」

「出たのは朝でしょ？ 今日泊まってくるんじゃないですか」

「かもしれないけど、電話が繋がらないのが不安なの。メールも既読が付かないし」

「電波が入りにくい所にいるのかもしれないよ。文彦さんの様子はどうです？」

「酷くうなされてます」

「またですか。最近続きますね」

「悪い夢でも見てるのかしら。きちんとお薬飲んでるのに」
 髻のおくれ毛を撫で付け、物憂げに目を伏せる。幸薄そうな撫で肩と細面に、右目の泣きぼくろが妖艶な色香を足す。所作が逐一垢ぬけているのは元ホステスだからだろうかと邪推し、そんな自分を恥じる。和服の着こなしも様になっていた。

『佐沼の嫁は魔性の女だ。転がされるなよ、駐在さん』
 余計なお世話な野次が甦り、慌てて首を振る。

清美の舅の文彦は認知症が進み、奥座敷で寝たきりだ。若い頃は筋骨逞しく厳格な地主として恐れられたらしいが、沖田が赴任する数年前に脳卒中をやり、体の自由が利かな

くなっていた。現在はヘルパー資格を持った家政婦と清美が介護を分担している。

「今夜は藤代さんもないでしょ？ お義父さんは寝付きが悪いし、なんかあったらって考えると不安になっちゃって」

「大丈夫ですよ。俺がいます」

「頼りにしてます」

キザすぎたかと悔やむも、清美が笑ってくれたのが救いだ。直後に空が光り、凄まじい雷鳴が轟く。

「きゃっ！」

飛び込んできた体をかき抱く。不覚にも胸が高鳴る。清美以上に動揺している自分に咳払いし、努めて平静を装い宥める。

「安心してください。ただの雷です、落ちませんよ」

「おきゆうさま……」

「え？」

夜空を切り裂く閃光が世界を漂白し、固く強張った清美の顔を暴く。

「義父が寝言で繰り返し呼んでるんです」

「誰ですか」

「日水村に伝わる土地神様の名前だとか。以前うちの人が教えてくれました。昭和の初め頃まで、佐沼家はおきゆう

さまに纏わる祭事を取り仕切っていたそうです」

清美は気の毒なほど怯えきっていた。

「俺も村のお年寄りの話を小耳に挟みました。裏山の社に祀ってあるんですよ。いや、具体的にご神体が何かとは知らないんですけど」

沖田がきた頃には大っぴらに参る人もいなくなっていた。

一見気さくな村人たちが、おきゆうさまに纏わる事柄には口が固い。清美が付け足す。

「村の人……特にご年配の方々は、口にするのもタブーと見なして避けてるみたいですね」

「桑原さんちのゴンをご存じですか、でっかくて白い」

「もふもふの可愛いわんちゃんですよ、放し飼いにされてる」

「前に一度そのゴンが迷子になって、腰を痛めた桑原さんの代わりに裏山にさがしにいったんです」

余談だが、田舎の人間は基本的に鍵をかけないし犬は放し飼いだ。ご近所全員顔見知りな上、庭先に勝手に出入りし野菜や回覧板を置いていく為、警戒の必要がないのである。

「清美さんはおきゆうさまの社をご覧になりました？」

「いえ。恥ずかしながら山歩きには慣れてないし、道が狭く険しいので」

「たしかに女性の足じゃ厳しいかもしれません。俺も山に

入るのは初めてでした、村の人たちがあんまり良い顔しませんし」

あれは半年前か。ゴンをさがしに山に登り、鬱蒼とした藪をかき分け進んでいくと、中腹に寂れた社が据えられていた。

正面には太い注連縄が張られており、木格子がはまった引き戸の奥は酷く静かで、異様な気配を放っていたのを覚えている。拝殿に掲げられた扁額はボロボロに朽ちていた。

「言っちゃなんですが、不気味な場所でした。一人で行くのはおすすめしません」

誰かに見られているような。何かが潜んでいるような。

『封印』―社を目の当たりにした沖田の脳裏に浮かんでは、それだ。

「 gon は近くで保護しました。あそこを遊び場にしてるみたいですね」

「よかった」

沖田の顔が和む。

「社に近付いちやだめって話がホントならゴンが真っ先に呪われなきやおかしいでしょ？ 単なる偶然を祟りや呪いと結び付けて考えるのは人間の悪い癖です」

「杞憂ですめばいいのだけれど」

清美が唇を噛む。

「おきゆうさまの社で遊んじやいけない、覗き見はもつてのほか……尚人さん、お義父さんたちに随分キツク言い聞かされたつて恨んでました。やつぱり呪われてるんでしょか。夫が山を切り崩したせいで義父や工事の関係者が」

「気にしすぎです。村の人たちには好きに言わせておきましようよ、尚人さんだつて社を潰す気はなかったんでしょ？」

「移転を考えてみたいのです」

当主の謔言に出てくるおきゆうさま。裏山で相次ぐ不可解な事故と工事の中止。

単なる偶然で片付けてしまうには不穏な現象の数々に鳥肌が立ち、黙り込む。

「玄関まで送ります。尚人さんはきつと無事に帰つてきますから……」

「ご心配かけてすいません」

「とんでもない。清美さんも……その、あんまり思い詰めないでください」

清美が青ざめたのを気遣い、雨合羽の裾を広げて頭上に翳す。二人寄り添い踵を返す間際、狂つたような犬の吠え声が聞こえてきた。清美が振り返る。

「清美さん！」

天が裂けた。

清美を庇い突つ伏す沖田の眼前で、裏山の斜面が地滑りし

ていく。

「きやあああああつ！」

大地を揺るがす震動、耳を聾する轟音。落雷の衝撃により雨で緩んだ地盤が崩れ、斜面の木々が倒れてへし折れ、大量の土砂がなだれを打つて麓の民家を押し流す。

「文彦さんは!?」

「西にいます！」

土石流は屋敷の東側を掠めるとどまった。

佐沼家の人々の安否を確認後、警官特有の使命感に駆り立てられ現場に直行した沖田は、土砂に埋もれた社の残骸に絶句する。

強風にもぎとられた木の葉が螺旋を描いて舞い上がり、枝が鞭の如く撓む。

社を封じる注連縄は切れ、天から降り注ぐ雨に打たれていた。朽ち木の扁額は真中で折れ砕け、瀕死のミミズがぬかるみを這っている。

追いかけてきた清美も言葉を失い、ずぶ濡れの沖田の隣に立ち尽くす。

二人の足元には白い雑種犬が徘徊していた。桑原が飼っているゴンだ。

「ワンワン！ ワンワン！」

歯を剥いて吠えるゴン。ぬかるみに浮き沈みし溺れるミミ

ズ。

「おい大丈夫か！」

「こりや酷い、完全に埋まっちゃってる」

「見ろ、社が……」

遅まきながら合流した青年団が麓に堆積した土石流に驚く。ゴンは眼光鋭く威嚇の唸りを発し、ぬかるみのミミズが浮き沈みする中、沖田が真つ先に異変に気付く。

泥に塗れた注連縄がさらに黒ずみ、身悶えている。

「ッ……」

瞬きする。目を擦る。注連縄はちぎれたまま……やつぱり幻覚？　じゃあなんでゴンが吠えてるんだ、人懐こい犬なのに。

「あなた!!」

ヒステリックな絶叫が思考を散らす。清美が片方の靴を飛ばし駆け寄る先には、何十トンもある土砂に押し潰され、辛うじて底の一部が露出した車があった。

佐沼尚人のベンツだ。

稲妻。戦慄。未曾有の大惨事が起きてしまった。目に映る光景は神なきこの世の終わりを思わせる。

「離れろ！　また崩れたらどうする、今度こそ巻き込まれるぞー！」

「はなして、あの人が中にいるの！」

「手遅れだ……土石流が運転席を直撃してる、即死だよ」

「落ちないって言ったじゃないウソツキ！」

「すまない」

残酷な光景を見せまいと片手で目を覆い、片手で引き止める。ちぎれた注連縄から立ち上る瘴気。廃材と化した社と泥にまみれ堕ちた扁額。力尽きて浮かぶミミズの亡骸。

「きやうんきやうん！」

やにわに硬直したかと思いきや、股の間にしつぽを巻き込んでゴンが逃げていく。

「じきに警察がくる、尚人さんの回収は任せるんだ」

死に物狂いに土砂をかき分け、転覆した車に少しでも近付こうとする清美を羽交い絞めにし、懸命に諭す。ざんばらに乱れた髪を纏わせ、美しい顔が悲愴に歪む。

「物みたいに言わないで……」

清美が跪いて泣き崩れ、青年団一同が無言で立ち尽くす。

「おきゆうさまが放たれた」

しわがれた声が重苦しい沈黙を破る。同時に振り向いた一同を出迎えたのは、寝間着をだらしなくはだけた佐沼文彦。奥座敷からさまよいでたらしい彼は裸足のまま、痰が絡んだ声で繰り返す。

「社が崩れた。おきゆうさまが野に放たれた。なんてことだ……」

ぬかるみに浮かぶミミズの骸が、地中に吸い込まれるように消えていた。

願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ

柳田國男『遠野物語』

七月某日、俺と茶倉は長野行きの新幹線に乗り込んだ。

今さらすぎる説明だが、茶倉練と俺は十年來の腐れ縁である。出会いは高校の頃まで遡り、男子トイレの個室でオナつているところをナンパされたのがきっかけだ。たちの悪い靈感商法を思い浮かべてもらえれば大体あつてゐる。

俺たちの関係は高校をでて大学に進み、社会人になつても変わらない……などという、毒舌の茶倉に「フリーターは社会人ちゃうで、社会に認められる事して初めて一人前になれるんやで」と突つ込まれそうでムカつく。

現在、俺は茶倉が取締役代表を務める事務所TSSで働いている。肩書は助手兼雑用係でぶっちゃやお茶汲みしてることとのほうが多い。ダチに顎で使われるのは業腹だが、厄介な体質のせいでまともな職に就けない手前こらえるしかねえ。以前居酒屋のバイトをした時は、店のトイレで発情す

るはめになり心底こりた。

車窓の外には牧歌的な田園風景と山の稜線が広がっている。水を張った田んぼは青々と輝き、麦藁帽子を被った案山子

が気持ちよさそうに風を浴びていた。

通路側のシートに座り、ジパングに豪遊にきたアラブの石油王の気分で肘掛けに腕をおく。

「なあ茶倉」

「なんや」

「本読んでるなら窓際譲ってくれてもよくね」

「誰のおごりでグリーン車のれとる思とんねん、普通車両にとぼすで」

「たしかに交通費はお前持ちだけど、そもそも出張代は会社が出すのが常識だろ」

「窓際が好きやねん」

「俺の方が似合うし」

「自分で言うとなつて情けのおないんか」

「まあ褒め言葉じゃねえかも。何読んでんの？」

首を傾げて覗き込む。茶倉が嫌な顔をし、手の甲で追い立てる。

「柳田國男『遠野物語』か。知ってる、現国の教科書に載ってた」

「同じ高校なんやし俺かて知つとるわ。どうせちゃんと読

んだことないやろ」

「授業中は大抵漫画読むか居眠りしてたんで」

「もしくはオナニー」

「ねーよさすがに、休み時間にトイレ直行したのは否定しねーけど。えーと、有名はフリーズあつたよな？」

俺の質問に一瞥もくれず、イケズな横顔で茶倉が回答。

「『願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ』」

視線は活字から離れない。面白いのか気になる。

「岩手県遠野地方の怖い話や不思議な話を集めた本だよな。民俗学者の柳田國男が書いた……」

「構ってやらんから暇しとるんかい」

図星。ちよつとだけ拗ねる。初体験のグリーン車は広く快適で空調も利いており、隣に茶倉さえいなけりや最高に思えてくる。弾力あるシートにもたれ、不服げに唇を尖らす。

「グリーン車内は私語厳禁なんて張り紙ねーだろ」

「騒音は迷惑」

「フツーにお喋りするだけだつての」

「地声がでかい」

「マジ？ そんなに？ 盛ってね？」

「序でに顔もうるさい」

そうと気付かず人様に迷惑かけてた可能性に動揺すりや、なんとも心外な指摘を返された。

「うるせくねーよ、ベリシヨと相性ばっちりあつさり塩顔だよ」

「ずっとその髪型やけど伸ばさへんの」

「めんどくせーじゃん、短い方がらくちんだし。長エとうなじがチクチクして落ち着かねえ」

「ふうん」

「もしもし練くん？ 自分で振つといて興味なさそうにされると傷付く」

「別に坊主でもアフロでもかまへんよ。離れて座るさかい」

「かまってるよね思いきり」

ところで茶倉は大学時代にメツシユを入れた。「大学デビューかよ」とからかったら「若白髪やで」と真顔で切り返され本氣にしたことは一生秘密にしておきたい。

「メツシユも知らんで笑えた」

「忘れさせろ。めつちや脱線したけど、読み物として面白いの？」

「拝み屋やつとるなら一般常識の範疇」

微妙な言い方。

「まあおもしろいよ、妖怪とか幽霊とかわけわからん神様よおけてくるし。岩とか木とかクセ強でべらべら喋るし。あと河童」

「実在すんの？」

「さあな」

「拝み屋なのに知らねえのか」

「仕事に関わってけえへんならおつてもおらんでもどつちもでええ」

ドライな態度を貫く茶倉にあきれ半分感心半分、窓ガラスに映った横顔を盗み見る。

「座敷童がいたなら河童もいるかもな。そつちのが楽しそうだ」

とりあえず納得し引き下がり、話題チェンジ。

「一番面白い話は」

「『ガガは生かしては置けぬ』」

「詳しく」

「嫁が不仲な姑にブツツンして、旦那が出とる間に殺つてまうんや。泣いて命乞いする姑にシカトきめて、『お義母さんは生かしておけない』でブツブツ言いながら草刈り鎌研ぐシーンがパンチ利いとった」

「殺人事件じゃねえか」

「猟奇な方の」

聞きたくなかった。死んだ目で草刈り鎌を研ぐ嫁と土間で縮こまる姑の姿が網膜に焼き付いて離れない。後悔する俺の隣で頬杖付き、片手でばらばら本をめくる茶倉は今日もハイブランドのすかしたスーツできめており、インテリに

見えないこともない。

「今昔、人間は変わらんね」

「ホラーによくありがちな生きてる人間が一番怖いってオチ嫌い。ロマンがねえ」

「怪談にロマン求めんの不毛やで」

「うるせえ」

「ほならホラーによくありがちなこれ見たアナタも呪われるゝつちゅーんは」

「安っぽいから嫌い」

憤然と腕を組み踏ん反り返る。ぶっちゃけ怖い話が苦手だが、体質上その手のものに免疫を付けなきゃいけない為此そこホラーを嗜んでいるのだ。

「ホラーはあくまでフィクションとして楽しみてエ派なの俺は、当事者に引きずり落とすのは禁じ手の反則だろ。てか見たら死ぬとか言われたら怖エに決まってるじゃん、もうそれ実害じゃん強制終了じゃん。今までコツコツ積み上げてきた恐怖ポイント返せよ」

「めんどいやつちやなくホンマ」

憤懣やるかたない俺を鬱陶しげに一瞥、紐を挟んだ文庫本を膝に伏せる。

規則正しい揺れに眠気を誘われあくびをかます。

「長野駅までどん位？」

「1時間てどこ。もうすぐ昼だしワゴン販売呼ぶか、ご当地限定駅弁ほしい」

「色気より食い気」

「朝早かったから腹減ってんだよ」

茶倉は食べ物にあんまり興味がない、したがって二人で出張する時は駅弁選びを任される。責任重大だ。スマホをポチポチ、長野名物の駅弁を調べながら呟く。

「その……俺たちが行く村」

ひみずむら
「日水村」

「そこ。長野駅から何時間？」

「三時間」

「長ッ」

「バスで行く。タクシーは割高」

「車でくりやよかったじゃん」

「道が狭くて険しいんや、峠越えは勘弁。うるさい顔が助手席でドヤつとると気が散るし」

「感情表現豊かって言え」

「黙れ平たいデコ族、貫通路送りにすんで」

「姦通？」

「なんでそっちは知ってんねん、電車の繋ぎ目のせつまいトコや」

馬鹿話をしてるうちにあつというまに時間が過ぎていく。

ある事実にとふと思ひ当たる。

「一緒に新幹線乗るの四度目か」

「せやな」

「前は座敷童子がでる旅館にお呼ばれした」

「温泉浸かってええ思ひしたな」

「修学旅行も休んだもん」

高校時代、コイツは修学旅行を欠席した。理由は知らない。家庭の事情に深入りするのともうかと思つて詮索は控えていたが、やつぱり気になるもんは気になる。

「なんで来なかったの？」

本音を言えば、京都で茶倉と遊ぶのをとても楽しみにしていた。だから休むと聞かされがっかりしたのだ。

自由時間を待つて班を抜け出し、じいちゃんと引き合わせようと計画してたのに……。

「やつぱアレか、出るからか？」

京都には大小無数の仏閣があり、恐ろしい幽霊や妖怪がうようよしてる。

拝み屋の孫として思うところがあつたのだろうかと思つて、逞しくすりや、鼻で嗤われた。

「一身上の都合」

「ごまかすなよ」

「気乗りせんかったんや」

「一生に一度の青春イベントじゃねえか」

「しよもないサプライズでも考えとつたんやろ」

なんだよお見通しかよ。腹立ちまぎれにコーヒー味のキャンディを噛み砕く。

じいちゃんと会わせたいってのは俺の自己満足だし、茶倉は全然興味ねエかもしれないけど、もうちよつと言いつてもんが……。

「ほなら言い直す。実家の都合」

「ばあちゃん関連？」

「……ん」

軽く頷く茶倉は唯一の肉親である祖母の話をしたがらない。高校卒業と同時に絶縁し実家にも帰ってないみたいだから、反りが合わねえのだろうと単純に解釈してた。

「ーそっか」

じゃあ仕方ねえと納得、したふりをする。茶倉は高校時代から祖母を手伝い、拝み屋の仕事で飛び回ってた。

それで一生に一度の修学旅行が潰れても、ダチと思いつく出作りができなくてもどうでもいいらしい。俺は、俺だけがどうでもよくない。自分のガキっぽさを恥じる一方で物分りがよすぎる茶倉にいらだち、ポーカーフェイスをひっぺがしたくなる。

「あの生八ツ橋、結構イケたろ」

「塩辛味とかゲテモンやん」

「イロモノ好きだろ」

「偏見」

「きなことか抹茶とかフツーのもあつたじゃん。どれが一番好き？」

「ラムネ」

「ゲテモノ好きめ」

仕方なく土産の話をする。茶倉はちゃんと覚えていた。胸の内のため息を吐き、しばらく揺れに身を任せる。

「本日はグリーン車をご利用いただきまして誠にありがとうございます、うございます、車内販売のお知らせをいたします」

「きたきた」

パツと目を開け座席から乗り出す。制服姿の添乗員がワゴンを押して歩いてきた。

「すいませーん、山賊焼き二個と冷凍みかんください」

「かしこまりました」

駅弁の包装紙を破きながら、常に通路側に座らせる理由に勘付く。

「茶倉さー、ひよつとしてワゴン販売呼び止めるために」窓際の返事がない。もしやと思いい向き直れば頬杖したまま寝ていた。瞼を下ろした顔にはうつすら疲労が滲んでいる。

「……おやすみ」

起こすのは可哀想なのでほっとく事にし、割り箸を咥えて割る。ふたを外すと白いご飯の上にんにく醤油味の中からあげが敷き詰められており、大いに食欲をそそった。一口かじると同時に、左手の数珠が濁り始めているのが目にとまる。

「いけね」

来る前に祓ってもらった。

いくら俺が自他ともに認めるド淫乱でも人様んちで致すのはさすがに抵抗を感じる、なんだってこれから行くのは喪服未亡人とそのお舅さんが暮らす屋敷なのだ。

事件の発端は三日前に遡る。その日も俺は茶倉にパシらされていた。

「頼まれたブツ買ってきたぜ」

『入れ』

「人として当然のマナーの労いは？」

『パシリが図に乗るんちゃうで。はよこい』

けんもほろろな対応に舌打ち。当然相手にも聞こえたはずだが安定のシカト。

自動ドアのご開帳を待ちきれず観葉植物が配されたホールを突っ切り、タイミングよく到着したエレベーターに滑り

込む。ギリギリセーフ。

壁によりかかりきよろきよろあたりを見回す。

以前乗り合わせた霊は成仏したんだろうか？ 茶倉にワンプンで祓われる瞬間を目撃してなお腹が引けちまうのは俺がヘタレビビリなせい？ いやいや一度あることは二度ある、二度ある霊障は三度あるのが世の習いだ。シャツの襟に指をひっかけ、反対の手で扇ぐ。

「あく極楽々。ギブミー永住権」

壁に背中を付けてずり落ち、ヒンヤリした感触を楽しむ。涼んでる最中にトイプードルを抱っこした老婦人が乗ってきた。

すかさず姿勢を正し対角線上の隅に行く。犬にガン見され気まずい。睨めっこで変顔作りやしっぽを振るだす。勝った。待てよ、この婆さんが幽霊ってオチはねえよな？

一度あることは二度ある、二度あることは三度ある。先日の災難が甦り、顔から笑みがかき消える。

注意深く視線をずらし、ドアの手前に佇む老婦人の後ろ姿を観察する。右手首の数珠は異常なし。犬はハッハッと舌を出していた。ペット連れってことは勘違い？ あのトイプーも霊だったり……待て待て、早合点は禁物だぞ。

老婦人はカジュアルなサンバイザーを付けていた。ちよつとそこまでウオーキングかジョギングにでも行ってきたよ

うな格好だ。大前提として、幽霊がサンバイザー付けるか？俺の葛藤をよそに、老婦人は虚空を見据えブツブツ呟き始める。

「だからね、写ってないのよまあくんの顔が。代わりに知らない子がいるの」

これは本格的にヤバイ。壁に張り付いて距離をとる俺をよそに、老婦人の声が一段高くなる。

「何のことって、こないだ送ってもらった運動会の写真よ！ゴール切った瞬間が他の子とかぶっちゃってるじゃない、少しはアングル考えなさいな。あなたってホントそういうところあるわよね」

な、なんだ……杞憂と判明しホツとする。よく見りや片手にスマホを持っていた。おつちよこちよいにもほどがあるぞ、俺。

老婦人が怪訝そうに振り向く。

「背中に何か付いてます？」

「いえッなんも憑いてません、気にせず続けてください！」
ぎこちない愛想笑いで促すも、老婦人はトイプーを庇いそそくさ離れていった。変質者確定、略して変確。

肩を落としビニール袋の中を覗き込む。コンビニで購入したのは期間限定ハーゲンダッツの新作。残り一個の所をゲツトできてラッキー。何の成果も得られませんでしたなんて

報告したら、次は二十分離れたコンビニまでパシラされかねない。鬼かよアイツ。

殆ど震動を感じさせずエレベーターが停止、ドアが左右に分かれていく。

「お先に」

軽く会釈して退出、「TSS」のプレートが打ち付けられたドアへ寄つてく。

「帰ったぞ」

ノブを回し言葉を失った。リビングのソファーに知らない女がいる。より正確に述べるなら、茶倉が女のブラホックを留めてやっていた。

「きやあああああつ！」

「うわあああああつ！」

速攻服を身に付け、走ってきた女に突き飛ばされ袋を落とす。彼女のハンドバッグにはシルバーの猫ちゃんチャームが揺れていた。

『ちなみにレンタルもやってます、ご用命ございましたらお気軽に。このブラックオニキスの数珠なんてお手頃ですよ、一週間10万円。シルバーのチャームは天使と妖精と猫ちゃんの三種類選べます』

即座に茶倉のインタビュを連想する。エレベーターに駆け込む女を棒立ちで見送ったのち、振り向いて叫ぶ。

「今のセフレ？」

「前に会った雑誌のインタビュアー」

茶倉はしれつとしていた。足元にコロコロ転がってきたダッツを拾い上げ、何食わぬ顔でふたを外す。

「失格。溶けとる」

「また凍らしやいいじゃん」

「一回溶かして固めたら味落ちんねん」

「出たく利きダッツの匠。履歴書に書けねえ特技」

「だれかさんとちごて舌肥えとるもんで。就職活動も必要ないし」

「お前がどうしても食いたいってごねっから自分の平熱より高え気温の中走ってきたんだぜ、その気になりやボンネツトで目玉焼き焼けたよ」

少しだけ頭が冷える。

「逆に感謝しろ。さつきまでカチンコチンだったんだぜ、ふた」

「手首捻らんように気イ遣てくれたん？ おおきに」

「下心はノーサンキュー。真心求む」

「軟弱ゲイに貧弱な坊や扱いされんのはいけすかん」

「誰が軟弱ゲイだ」

「お前」

「元剣道部主将だぞ。全国大会決勝まで行った」

「中学でとった杵柄持ち出してまで勝ちたいん？ とんだ負けず嫌いじゃんけ」

口喧嘩じや分が悪い。

よく考えりや茶倉が事務所に女を連れ込むのは今に始まったことじゃねえが、致してる現場を目撃するのは今回初で、自分でも意外なほど動揺してた。腹立ちを持て余しなじる。「なんで鍵しねえの。見せ付けんのが趣味？」

「お前が来るまでに帰らす予定やった」

「ホック留めんのに手こずったわけか」

「まあな」

「よく平然と通話できたな」

「喘ぎ声がBGMに入つとらんで残念？ ゲイには関係ないか」

言われてみりや背後で衣擦れの音と荒い息遣いがしたような……気付きたくなかった。

隣に女が寝てる状況で受け答えできるなんて神経が図太すぎる。

「あのさく女の子に恥かかせた反省や罪悪感はねえの？」

「ダッツ足りて良かったやん。どのみち買いに行くんはお前さかい関係ないけど」

このように、茶倉練は性悪である。

プラスチックのスプーンを咥え「いまいちな」と品評す

る様子はまるで悪びれちゃない。思わず皮肉を言いたくなる。

「……女のブラホック留める甲斐性あつたんだな」

「自分じゃむずかしゆうから代わりに」

「すけこましが」

「せっかく訪ねてきはつたのに手ぶらで帰せん」

「おもてなしか」

「サービス精神旺盛やろ」

「リピーター確保が今後の課題？ 寝た女にただでチャームやるって噂になつてんぞ」

「おまけやて」

「この猫がいいねと君が言つたから7月8日はセフレ記念日？」

「ネタ古」

髪をかき上げうなじをさらす女と、こなれた手付きでホックを留める茶倉を反芻しむしやくしやるする。

俺はゲイだが茶倉はノーマル、恋愛対象は女。んな事わかつてる。それはそれとして納得いかねえのは……

ぴりりとビニールを剥がし、アイスの表面にスプーンを突き立てる。

「俺のパンツは上げてくれたことねえくせに」

おもしろい顔面を返された。若干引いてる？

「甘え腐んなボケ、誰が下の世話まで焼くかい。なんならお前の給料から除霊代差っ引いてもええんやで」

茶倉はめちやくちや女癖が悪い。俺が把握してるだけでも独身人妻問わず2・3人セフレをキープしてる上、依頼人に手を出す事もしばしばときて職業倫理を問いたい。

「誤解すなよ、無理強いはしとらん。向こうから粉かけてきたのに恥かかせられんよって」

「心を読むな」

「顔に出とる」

「この為にソファー新調したの」

「俺の聖域でナニしよが自由」

「セイはセイでもりっしんべんの方な」

指で宙にでかでか「性域」と書く。

コイツにや妙なこだわりというか癖があり、事務所のソファーでセフレと致すのだ。奥のドアを開け、寝室に連れ込むことは滅多にない。手あたり次第無節操に見せかけ一応線引きはしてるのだ。

どうでもいいが、俺もベッドで抱いちやもらえねえ。除霊ならソファーで十分とでも思つてやがんのか……

特別扱いしてほしいわけじゃねえけど、そこそこ長い付き合いの間柄で水臭えと不満が募り行く。初体験もカラオケボックスの安っぽいソファーだった。

茶倉が指揮棒の如くスプーンと靴の先端を回し、ドヤる。

「案件が片付いた依頼人しか手エ出さへんで？ 自由恋愛の範疇」

「よくいうよ人妻好きが。高確率で浮気じゃん」

「パートナーの意志は尊重しとる」

「挿した腹いせに刺されるとか自爆ギャグかよ」

「未遂やし」

どこまで信じていいか怪しいもんだが、依頼人と深い仲になり、揉めたりこじれたりするのが面倒くさいってのが本音らしい。数か月前にもセフレの一人がストーカー化し、刃傷沙汰を起こしている。

茶倉に堕ちた女はろくなことにならねえってのに、どうしてみんな見る目がないのか。やっぱ顔か、顔なのか？

対面のソファーに腰掛け、ぼやく。

「あの子もクチャラーになっちまったか」

「わざと間違えたなジブン」

「チャクラーとクチャラーで似てるよな語感が」

「嘸めば嘸むほど味がでる」

「もつと恥ずかしがるとかしろ」

「換気は済んだる」

「生々しい……」

聞いたのを後悔した。

「俺のプライベート気になるならゴミ箱漁ってどうぞ、燃えるゴミの日さかい代わりに捨てといてくれ」

「午前中に回収終わってんぞ」

あきれ顔で突っ込んだのち、頭のとっぺんから爪先まで見直し違和感を覚える。

好奇心を押さえきれず、声を潜めて訊く。

「お前……やる時脱がねえの？」

ハイブランドのスーツに皺一筋ないのを訝しめば、スプーンを持った手が止まる。

「俺とする時だけかと思ったら女とする時もそうなんだな、やりにくくねーの」

「そっちの方が主導権握つとる感じしておもろい」

「性格わる……」

「おおきに」

「誤用だぞ」

匙を嘸んで喰る俺に対し、につこり微笑む。

「今度は脱げよ」

「そない剥きたいんかスケベ」

「俺だけ素っ裸はなんかやだ。なんていうか、フェアにいかうぜ。一方的にいいくらわれるだけってちよつと、かなりアレだし」

「文句が多いやつちゃな、気持ちよかったってのに」

「コミュニケーションの問題」

改まって言うのも恥ずかしいが、言った。

案の定気分を害す。

「除霊のたびに脱いでたら手間でかなわん。露出狂ちやうねんぞ」

「だよな」

がつくり。茶倉ん中じや除霊は仕事の範疇、したがって俺とやる時に脱ぐ意味がない。

理屈はわかるものの、割り切るのは難しい。

「いちいち脱いで畳んでたら皺になっちまうもんな」

「全裸に数珠だけで変態くさくて笑えるし」

「喧嘩売ってる？ ヴァシユロンコンス、ス……スタタターン割るぞ」

「言えてへんやん」

「るつせーすつとこどつこい、早口言葉みてえな腕時計すんな」

「やいとるん？」

図星を突かれた。

女の白い背中が脛に浮かび、ぐつと言葉に詰まる。茶倉が勝ち誇り左手を突き出す。諦めて手首を裏返す。瘴気バロメーター代わりの数珠は綺麗なまま、かえって恥をかく。

「ふーん」

「はなせ」

長さと関節のバランスが絶妙な指が、白く光る数珠を一粒一粒辿っていくのを振りほどく。

「なに拗ねとんねん」

「お前がヤツたソファアでやりたくねえだけ」

「さよか。ほならご勝手に」

悔やんだ時には手遅れで、茶倉はすっかりその気をなくしカップを捨てた。

ピンポンが鳴り、インターフォンから涼やかな女の声が流れた。

『二時に予約した佐沼です』

「お待ちしました。お上がりください」

即座に営業スマイルに切り替え、俺の尻を叩いて急かす。

「出番やで、お茶汲み係」

「ランクは？」

「玉露。接待気張り」

およそ二分後に事務所に通されたのは、ひつ詰め髪すら色っぽい喪服の女性だった。

「はじめまして。佐沼清美と申します」

見た目は三十代後半、所作が垢ぬけている。右目の下の泣きぼくろの幸薄そうな風情もそそのる。

茶倉が腰を浮かし対面のソファを勧めるや、丁寧に一礼して腰を下ろす。じろじろ見んのは失礼だと心得ちやいるが、インパクトが凄い。一旦給湯室に引つ込んでお茶を淹れてくる。

「粗茶ですが」

「ありがとうございます」

実際は京都直送、一袋五万円の最高級玉露だ。

ここだけの話、TSSじや依頼人のグレードごとに出すお茶が決まってる。下から使い切りティーパック、市販のお茶、玉露。ティーパックは干して使い回す事もあるが、殆ど嫌がらせだ。京都人が長つ尻の客にぶぶ漬け出すのと同じ理屈。

とはいえ出廻らしを飲ますのはひやかし目当ての迷惑ユーチューバーや押しかけファンが主なんで、あんまり心は痛まない。そーゆー連中の多くは茶倉に除霊バトルをふっかけ一部始終を生配信したり、「付き合ってる人いるんですか」「ここに住んでるんですか」「年収おいくらですか」と詮索するのに夢中で茶の味なんざかまやしねえ。

ドケチがスーツを着て歩いてる茶倉が玉露ランク認定したって事は、相当な金持ちに違いねえ。見た感じ資産家の未亡人てトコか。第一印象を胸に折り畳み、両手に盆を抱え茶倉の隣に控える。

「それで、本日のご用件は？」

愛想よく切り出す茶倉を上目遣いにうかがい、おずおず口を開く。

「まずはこちらをご覧ください」

ハンドバッグから出されたのは、土砂崩れの現場写真が載った記事の切り抜き。茶倉が素早く読み上げる。

「『台風17号が与えた深刻な被害 日水村で土砂災害発生犠牲者一名。六月二十九日未明長野県東部の日水村で大規模な土砂災害が発生し、同村の自営業・佐沼尚人（54）さんが死亡した。佐沼さんは車で帰宅中に日水山の土砂崩れに巻き込まれ即死したと見られている。警察の捜査の結果、家族が待っているから』と知人が止めるのを聞かず車を出した経緯が判明した。他の住民は避難済みで全員無事だった』」

「尚人は夫です」

「お悔やみ申し上げます」

頭を下げ、気になっていた事をたずねる。

「だから喪服を？」

「四十九日経っておりませんので」

「いまだき珍しいですね」

「夫に先立たれた嫁は、喪が明けるまで黒ずくめで過ごすのが佐沼家のしきたりなんです」

おくれ毛を梳き、ほんの僅か恥ずかしげに微笑む。

清美さんは三年前に尚人氏と再婚し、夫の故郷である日水村に移り住んだ。夫の実家には脳卒中の後遺症で体の自由な舅と通いの家政婦がいた。

「佐沼家に入る前は何を？」

「六本木のクラブでホステスをしておりました。尚人さんは元お客様で、臍履にしてくださいっただんです」

「どうりで垢ぬけてらっしゃいますね。僭越ですが、色眼鏡で見てる方もいたんじゃないですか」

「とんでもない！ 皆さん親切にしてくださいましたし、私も佐沼の嫁の自覚をもつて家を支えて行こうと思いましたが」

「村一番の旧家というはなしですが」

「付近一帯の地主です。GHQの農地改革で徴収されるまで広大な田畑や土地を所有していたとかで、村の北側に面した日水山も佐沼の持ち物でした」

「日水村、日水山……変わった名前ですね」

茶倉に横目で睨まれた。清美さんが柔和に苦笑する。

「お山のせいで日を見ずが訛り、日水山、日水村になったそうです」

「このデカさじゃ遮っちゃうでしょうね」

「古い土地柄なもので、色々言い伝えがあるんですよ」

「今回いらした目的にもその言い伝えが関係してるんでしょうか」

漸く顔を上げ、真剣な表情で言った。

「夫はおきゆうさまに殺されたんです」

「おきゅ……？」

聞き間違いかと思った。首を傾げる俺の隣でくしやりと音がする。茶倉が怖い顔で切り抜きを握り潰していた。束の間の放心状態。

「おーい」

小声で名前を呼ぶ。我に返った茶倉が緩やかに瞬き、決まり悪そうに咳払いする。

「おきゆうさまで、今そういうたんですか」

「関西弁」

「失礼しました。続けてください」

俺の指摘で失態に気付き、流暢な標準語に直す。

別にどっちもでもいいけど、依頼人には標準語で対応するのがコイツのポリシーのはず。

「おきゆうさまは日水村の土地神です。先日の台風で日水山の斜面が崩落し、おきゆうさまを祀った社も押し流されました。だからでしょうか、尚人さんが死んだのはおきゆうさまの祟りだって皆さんが」

「待つてください、尚人さんはおきゆうさまに恨まれるよ

うなことしたんですか」

「日水山を業者に売却し道路を通す予定でした」

日水村は人口三百人足らずの山間の集落で、曲がりくねった峠道が唯一の交通手段だそうだ。日水山に道路を敷けば、隣町まで歩いて三時間の道のりが五十分に短縮できる。

「それは便利でしょうね」

「村の人たちには猛反対されました。日水山は土地神様がおわす神聖な場所、重機を入れて崩すなど言語道断、木を切るなどけしからんというのが彼等の主張です」

「神域だったんですね」

「もしくは忌み地でしょうか。数十年、数百年前は神隠しや姥捨てが絶えなかったと聞きました」

清美さんの目が昏く翳る。

「山に入った人間は二度と目の目を見る事がないから日見ずの山、日水山とする説もあります」

時代錯誤な話だと呆れる一方共感できなくもねえ。生きてる人間が興味本位で足を踏み入れちゃいけない領域は確実に存在する。

「予期せぬ事故が相次いで計画は中止になりましたが本人は諦めきれず、接待したりされたりコネ作りに飛び回り、仕切り直しの機会を窺ってました」

「予期せぬ事故とは」

「重機が突然故障したり作業員が発作で倒れたり。工事に土砂や倒木の下敷きになった事も」

清美さん曰く、重機の点検や現場の下見はきちんとしており事故原因は不明。ただの偶然で片付けちまうには些か気味悪い不幸の連続というしかない。

俺は手を挙げる。

「おきゆうさまってどんな神様なんすか？」

「よくわかりません。尚人さんや村の人たちに聞いても話したがらず……よそ者だから教えてもらえないだけかもしれないですけど。ただ……とても怖い、とても大きい神様とだけ聞いています」

「鎮めるにしろ退治するにしろ肝心の正体がわかんなくやお手上げじゃん」

口数少ない上司にこそこそ耳打ち。何とかしてやりたいのは山々だが、情報が足りなすぎて解決の糸口が掴めない。茶倉が落ち着き払って口を開く。

「清美さんは旦那さんの事故の原因がおきゆうさまにあると、本気でそう考えなんですね」

「正直半信半疑ですが……尚人さんが死んでから、村で変なことが続いているのは本当なんです」

「たとえば」

「舅の悪夢と寝言、徘徊癖が酷くなりました」

「認知症で寝たきりのお義父さん？」

「毎晩うなされながらおきゆうさまを呼んでるんです。もごもごして聞き取り辛いんですけど、なんだか謝ってるみたい。村の人たちもうちを避けはじめて……塀や表札を汚されたり門前にゴミを撒かれたり、以前にも増して嫌がらせがエスカレートしてきました」

「警察に通報されてはいかがでしょうか」

事務的なアドバースにハンドバッグを握り、唇を噛む。

「一番怖いのは地震が増えた事です。日水村だけなんです。土砂崩れ再発の予兆じやないかって、皆怯えています」

「村限定の局地的な地震……」

思慮深く唇をなぞる茶倉の横で、またしても手を挙げる。

「村だけってどうしてわかるんですか。予報？」

「実際にみればわかります。揺れてるのは道祖神の内側だけ、境界線でも引いたみたいにあつちとこつちでくつきり分かれてるんです」

道祖神つてのは峠や辻、村境に悪霊や疫病を防ぐ目的で据えられる石仏をさす。別名たむけの神ともさえの神ともいい、地方によつちや子どもと親しむ神ともされてきた。以上、茶倉の受け売りなんであしからず。

震える手でスマホを操作し、以前撮った動画を再生する。

「見てください。証拠です」

日水村の入口に据えられた道祖神の石仏を指し、続いて地面の一点をタツプ。

「大きくします。十円玉が揺れてるのわかりますよね？」

こつちに持つてくると、ほら」

彼女の言うとおり、道祖神の向こうに置いた十円玉はひとりでに動いている。手前に移したら微動だにしない。茶倉と二人してスマホを覗き込み、言葉をなくす。

「私、怖いです。尚人さんがおきゆうさまの怒りに触れて祟り殺されたのが事実なら、次に狙われるのは私やお義父さんかもしれません」

「何故」

「土砂崩れの原因は尚人さんが無茶な工事を強行したから、そのせいで山の地盤が緩んだんです。私が止めても将来的には村の利益になるの一点張りで、全然聞いてくれませんでした。身内がしでかした不手際ですし、おきゆうさまに恨まれても仕方ありません」

「あなたやご家族が現状祟りを被っているわけではない？」
ドライに念を押す茶倉に対し、清美さんがキツく眉根を寄せる。

「最近、夜になると子どもの泣き声が聞こえてくるんです」
「男の子？ 女の子？」

「どちらかわかりません。けどとても哀しそうな声でした。心配になってあちこち出歩いても見当たらず……私に子どもはいません。佐沼の屋敷は他からボツンと離れてるし、村に小学生はいないはずなのに、やつぱりおきゆうさまと関係あるんでしょうか」

夜の静寂の中、か細く響き渡る子どもの鳴咽を想像しぞくりとする。

「どうして結び付けたがるんですか」

「神様には生贄を捧げるのがお約束じゃないですか。声が聞こえ始めたのは尚人さんが死んだ日の夜、偶然とは思えません。きつと日水山の社で生贄の子を殺してたんだけ、土砂崩れがきっかけで可哀想な幽霊がさまよいでたのよ」

「落ち着いてください、あなたの推理が正しいなら災害時に遺骨が出てこなきやおかしいでしょ」

茶倉の指摘は一理あるが、清美さんは聞く耳持たず腰を浮かす。

「私だけじゃありません、義父や家政婦さんも聞いているんです！ それに村の雰囲気も変なんです。得体の知れない何かに終日見張られてる感じがして、みんなビリビリ殺気立って……村役場じゃ社の再建計画が持ち上がりましたが、棟梁が体調を崩されて全然進んでません。お願いします茶倉さん、一度いらしてください。何もないならそれでいい、

むしろ何もないと証明して私たちを安心させてください」

声がヒステリックに高まる。茶倉はうんざりしていた。

「失礼ながら、家を出る選択肢はないんですか？ 旦那さんが亡くなったんなら居残る理由もないはずですが」

「養父を見捨てていいけません。結婚する時、最期までお世話すると約束したんです」

清美さんの決意に目頭が熱くなり、加勢に回る。

「二・三日お呼ばれする位減るもんじやないいいじゃんか、こんだけ頼んでるんだぜ」

「減るわい交通費」

「もちろんそちらもお支払いします」

清美さんが分厚い封筒を机に滑らす。

「とりあえず手付け金をお受け取りください。三百万あります」

「さっ!？」

TSSがいくら暴利とはいえ、前払いの手付け金三百万は破格。茶倉も喉から手が出るほど欲しいはず。

「問題が解決したらさらに倍額お支払いします。お願いします、この道のプロと特んだ茶倉さんしか頼れる方がいないです」

清美さんと茶倉が瞬きもせず対峙する。玉露には結局口を付けないまま、湯飲みの存在さえ忘れ去られていた。

封筒から出した札束を弾いて数え、茶倉が特大のため息を吐く。

「ーわかりました。善処します」

「ありがとうございます！」

清美さんは何度もお辞儀して帰って行った。ドアが閉まったのを確認後振り返りや、茶倉は机に封筒を投げ出し物思いに耽つてゐる。その視線がこちらを向く。

「俺が今考えとることわかるか」

「喪服未亡人最高」

「否定はせん。泣きぼくろがそるわ、あとうなじ」

「人妻フェチめ」

「熟女も嫌いやない。どうでもええけど、未亡人寝取るA Vは位牌を倒すんが合図で知ってた？」

「やけに詳しいのが怖エしドン引き」

ずばり切り込む。

「気乗りしねエの？」

「依頼内容がふわつとしすぎ。長野の端つこのしみつたれた村に神様だかなんだかよわからんのがおつて、ソイツの祟りで土砂崩れが起きて、嵐中ちんたら運転しとつた地主の倅が死んだ。その日から夜な夜な子どももの泣き声が聞こえてくるわ村中で地震が相次ぐわ、踏んだり蹴ったりちゅー話やな。拝み屋の管轄かわからんけど……本職の

カウンセラー向きや」

「被害妄想だつて言いたいのか」

「半分がた」

「子どもの声は舅や家政婦も聞いてんだろ、立派な傍証だ」

「同情して話合わせとるんちゃうか？」

「んなまさか」

「少なくともあの清美つて女から変な気配は微塵も感じなかったで」

茶倉が断言すんなら間違ひねえ、今の段階じゃ清美さんに祟りは及んでないと見ていい。

……が、問題はそこじゃねえ。清美さんが「おきゆうさま」と発した瞬間、傲岸不遜な守銭奴の顔が強張つたのは見逃せねえ。

端正な面を染めたのは紛れもない嫌悪と恐怖の感情、長い付き合いを自負する俺が見たことない戦慄の表情。

物言いたげな視線を受け、紙幣をしまった茶倉が話題を變える。

「道祖神は子どもと親しむ神で言われとるし、泣き声と無関係で決め付けるんも早計か。調べてみななんとも言えん」

「……嫌なら無理にやんなくても」

今から追いかけりやまだ間に合うと判断、お伺いを立てる。茶倉は何も言わず湯呑を一瞥、呟く。

「もつたいな。すっかりさめてもた」

次いで封筒にキスし、不敵な笑顔で向き直る。

「喜べ理一。三百万もろたさかい、グリーン車予約できるで」

安心したら喉が渴いた。玉露は冷めてもうまい。だしぬけに湯呑を掴み、すっかりぬるくなつたお茶を飲み干す。

「げほげほっ！」

濃すぎてむせた。

（以下続）